

論争のハブ空港や天高し

幸枝

所管大臣の観測気球的発言に端を発したハブ空港問題は、経済的な地盤沈下を懸念されている日本にとって喫緊の問題として、世間の耳目を集め、候補空港を抱えた地域では政財界を巻き込んだ騒動になっている。時事問題を題材にする俳句については、その時間的賞味性・刹那性を問題にする向きもあるが、長々とした散文による大論文よりも、的を得た寸言による俳句表現の方が、問題の核心をつくことがある。俳句の機能の一つに、今の社会や世相に対する庶民の批判やつぶやきの披瀝、があるとすれば、俳句の一過性を問題にすること自体が無意味である。

掲句では「論争の」という言葉を用いることによって、今のハブ空港問題を切り取っている。「論争の」という括りの背後には、いずれハブ空港問題が過去の小さな出来事として記録されているだけの時期が来るのではないかという、作者の覚めた目があるように見える。その意味では「天高し」の下五は、無難なまとめ方であるが、「空港」に「天」の配合は、少し関係性が強すぎる気がしないわけではない。筆者の好みからすれば、「蛇穴に」として、諧謔性を出してみたい句材である。

秋闈けて己が余生を計りぬる

与史

春夏秋冬の四季を人生に当てはめると、誕生から学業を終えるまでの春、職を得てあるいは事業を起こして社会で最大限に活動する夏、その職を辞しあるいは事業から引退して余生を楽しむ秋、そして、人生の終末を迎える冬ということになる。このような観点からすれば、上五の「秋闈ける」と中七の「余生」は過不足なく配合されている。しかし、「秋闈ける」と「余生」だけでは常識的な句に終わってしまう。掲句は下五に「計る」という言葉を投げ込むことによって、作者独自の感慨を盛り込み、これによって俳句としての成功を得た。「計る」という動詞にはいろいろな意味があり、読者によって多様な鑑賞が可能な句となっている。

見得を切る地芝居歌舞伎水を打つ

幸

地芝居すなわち村芝居は、秋の収穫を終えた村落の神社において奉納される芝居興行である。典型的には、地方巡業を専業とする歌舞伎劇団の一座が毎年あるいは隔年にやって来る。特に年配の方々には楽しみな行事である。

掲句では、今しも筋立ての最高潮の場面で登場した看板役者が、最高の見得を切っているのである。これに対して、満場の観客は水を打ったように静かとなった。もちろん、一

瞬の静寂のあと、大歓声と大拍手が境内に満ちたことであろう。俳句の骨法の一つに、「眼前に展開する一瞬間の出来事とその感動を詠む」ということがあるが、掲句はこれによるものである。掲句の「水を打つ」は、夏の季語の打水」ではない。地芝居の観客席の一瞬の気配を指した言葉である。

天高し老いの一団走り去る

ヤエ子

俳句の妙味は、常識とは異なる事象に出会い、それを平易なことばで言い止め得たときである。常識的には、老人は転ばないように気を付けてゆっくり歩いている。それに対して、老人が、しかも集団になって駆けていくのである。作者自身も山歩きの基礎体力作りとしてのランニング中であったのかも知れない。それをいとも簡単に追い抜いて行くグループがある。しかも、どう見ても自分より年配者ばかりである。率直な感動は良い句が生まれる源泉である。「走り去る」という平易な表現が、そのときの印象を素直に的確に表現している。

秋の虹メモすべきこと忘じけり

秀一

虹は夏によく空にかかるため、夏の季語とされているが、もちろん他の季節でも出る。そのため、「春の虹」、「秋の虹」、「冬の虹」の季語が用意されている。消えやすいことの象徴であるが、季節ごとにそのニュアンスは微妙に異なる。

作者は、前出の「秋闈けて・・・」の掲句と同じように、掲句では「秋」を「人生の秋」と捉えているように思われる。この時期に入ると悲しいことに、老化現象は誰にも遠慮会釈なく公平にやって来る。筆者自身も「人生の夏」の時期では、仕事の打ち合わせはメモなど取らなくても、後で内容を正確に再現できた。それなのに「人生の秋」が到来すると、忘れることはしばしばあり、メモをしっかりと取らないと内容を復元できないことが多くなつた。

掲句の作者は、このメモを取ること自体を忘れたといっている。この自虐的とも言えることを、飄然と言つてのけることができるのが、まさしく俳句という表現形式の力である。

ほろにがきワインの色に愁思かな

文枝

ワイングラスに注がれているワインの色。口にふくめば感じるほろ苦さ。一杯のワインを媒介として視覚と味覚の両面から「愁思」を言い当てようとした句である。「愁思」の句は、ともしれば述懐的あるいは追想的ないし叙情過剰的な句となりやすいが、掲句の場合には、ぎりぎりこの当落基準線を越えているのであろうか。筆者の苦手とする季語である。

とあるサロンをのぞいたとき一つの作品のまえに笑みを浮かべる人がいる。掲句の作者は、その人物をその作品の作家であり、入選の結果に喜んでるものにとらえたのである。よく俳句では「断定せよ」と言われることが多いが、作者は「入選か」として、断定をしないことを選択している。掲句では、この選択は正しいものと思われる。下五の「秋サロン」は、「サロン秋」とした方が、「美術の秋」という感じが出てくるのでは。

会場・桜蔭会館 文責・増田 守

【事務連絡】

瀬戸溪水さんから十月三十一日にお電話があり、「例年、十一月は持ち寄りの定例会はなく、通信俳句会だけなのでは」とのお問い合わせがありました。しかし、四月配布の今年度日程表には、通信句会とともに、十一月二十二日の定例会が記載されておりますので、この予定表通りに持ち寄りの定例会も開催します。

通信句会については、同封の投句用葉書を十一月一日締切りにてご投函下さい。追って、十一月二〇日頃に出句一覧表と互選用葉書を郵送します。

なお、一〇月定例会には野上貞勝さんの欠席投句がありませんでした。みな不思議に思っておりますが、結果的に貞勝さんの投句封筒は一〇月二八日に郵送されて来ました。

もしも貞勝さんにご異論がなければ、これらの句は、十一月例会の互選対象に入れることにします（もちろん、貞勝さんは十一月例会の句として別に五句出句できます）。